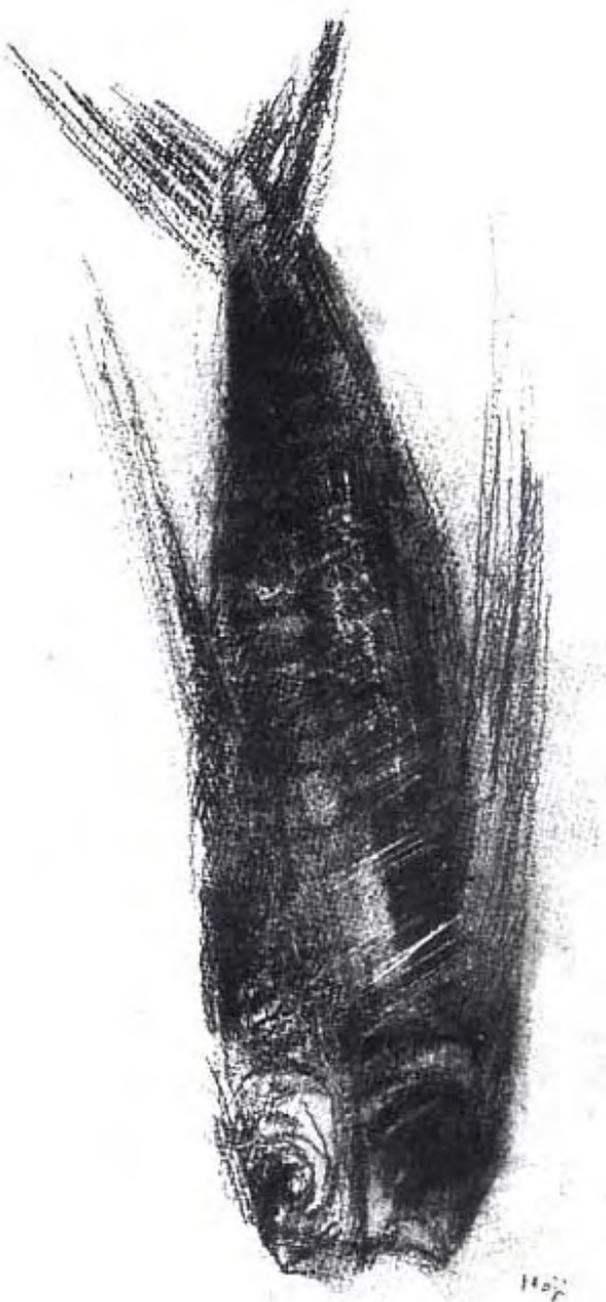


昭和43年7月1日第3種郵便物認可  
平成17年11月5日発行(毎月5日1回発行)  
第45巻11月号(通巻556号)

# 風土



糸瓜咲いて

神蔵

器

子規の逝く午前一時や月天心

伏せてある子規の味噌鰯雲

声に出て子規の鶏頭数へゐし

糸瓜咲く疾切り飴に子規の貌

一人来て多勢に会へり子規忌かな

菅笠は子規と節と雁の頃

糸瓜咲いて付句のごとく墨の痕

子規物語公演

糸瓜咲き一言三言子規と律

会ひに行く月の田端の大竜寺

曼珠沙華土葬の子規を煽れるや

悼酒井章鬼

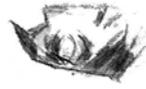
章鬼逝く生駒に二十三夜月

月光にたましひ削る思ひかな



# 竹間集

同人作品



蟬しぐれ

門伝 史会

青葉須磨寺の笛厨子に拝して蟬しぐれ  
炎備前屋の敦盛塚に真向へり  
赤松宮島の割木の乾く夏の雲  
蟹の穴潮風通ふ能舞台  
初潮や砂地に立ちて大鳥居  
大名後楽園蓮風吹きあげて広葉揺れ  
迎火弟の家や新建ちにして父母迎ふ

「櫻」以後(六十一)

野沢しの武

露寒を言ひ姉見舞ふこともいふ  
櫃に降る雨を見てゐる秋思かな  
菊を焚く煙の中に妻がをり  
石路の冬起居つまづくこと多く  
雪吊庭師はのもの散らかして昼餉とる  
雪吊が立ち坪庭の芯となる  
靴の雪融けて画廊の床濡らす

送 火

鈴木 石花

建長寺柏桜師軸星涼し  
新涼や小間に無事は貴人掛け  
無縁仏万に送火万点る  
紅白金水引の向きそれぞれに  
歌舞伎座の一行五番席涼し  
露草や連理の句碑に跪く  
低く歌ふ愛のシャンソン長き夜

海鳴り

— 瀬戸 悠 —

ひざまづき掬ひてこぼす夜光虫  
洗ひ髪波の白穂を夜目に見て  
青嶺美し鮎焼く火色美しき  
暮れきらぬ空の縹や鮎を焼く  
川音のときに激して秋に入る  
雁の空のひらけし針の穴  
産土の山河寂ゆく鮎落ちて  
城跡に朝の散歩や秋の蟬  
鳥渡る淀にありける照り翳り  
流木にとどまる鳥も秋の景

良夜にて湯屋にややこのこゑのあり  
白波の沖に日当る地藏盆  
地藏会のあうらましろき子を抱いて  
立冬の雀のこゑのつつがなし  
墓域にて枯菊焚きしけむりなり  
碧紺の海まなかひに菊を焚く  
吹く風の意にもそはずよ枯葦は  
海鳴りの日向に冬菜育ちをり  
荒星に布巾を干せば今日の行く  
天穹に星の私語ある暮の市

# 山河集

同人作品



神蔵  
器選

かなかなの声のさざ波加悦<sup>か</sup>の里  
水音の貴船百戸や星月夜  
蓮百花一望に風生まれつつ  
西行に「芹摘む人」や白桔梗  
鳴日和児のポスターに目鼻なく

橋添<sup>か</sup>やよひ

八月や古都くろがねの駅に立つ  
一粒の洗米拾ふ終戦日  
滴れる回峰行の崖の道  
大原の野はむらさきに紫蘇畑  
うすれゆく火の美しき大文字

池田加代子

羅<sup>ろ</sup>ヘルミヤ  
幻覚と遊ぶ病床明け易し  
慎重にうつ寝返りやががんば来

山本 浪子

ひたすらに睡魔を待てば朝蝟  
燠となる背の痛みや稲光  
完治する予感窓辺につくつくし

稲の花空にも渚ありにけり

工藤<sup>ミ</sup>ネ子

青鷺の一声を浴ぶ白昼夢  
声に出て一句の重し鶏頭花  
ふるさとは羽の北はづれ盆の月  
くれなゐを纏ひ出でたる穴まどひ

甚平の背<sup>すかめ</sup>の写楽の眇かな

柿沼 盟子

夏潮や海へのり出す水族館  
簪のごとく土用芽ありにけり  
豊かなる水の国かな新豆腐  
裂織の畳みし嵩や蕎麦の花

竹 煮 草

菅野 末野

初雛の解けばにほへる金屏風  
春立つや箴の目粗き葛布機  
花冷えや遣跡掘場の忘れ傘  
行く春の峠西行歌碑ひとつ  
多羅葉に記す人の名春惜しむ  
牧水の歌碑の松原鳥帰る  
上がり来て海女の髪梳く掛け鏡  
朝市の浅蜷何やら呟けり  
母の世の張り板二枚蕨干す  
棒読みの留守番電話鳥雲に  
咲き極む泰山木の忘我かな  
木菟鳴くや炉縁に杣の煙管疵  
まな板の殺生疵やほととぎす  
青田道自転車で来る水奉行  
母の日を手持ち無沙汰に過しをり



第 28 回桂郎賞俳句部門入選

浴衣縫ふ二丈六尺鯨差  
曝されてをり婚姻の誓文  
献立のあら煮定食大南風  
干鰯寄り目重ねて売られをり  
海の日や鍵頑丈に蛸の小屋  
灼くる碑の端に父の名竹煮草  
炎昼や手押しポンプの誘ひ水  
生国は越後高田の菊脰  
この峡の水を濁さず鰻棲む  
一心に燃えて香らぬ曼珠沙華  
試飲して蝮酒とは知らざりし  
楡一樹椋鳥の大群収めけり  
西行の歌碑の背濡るる秋時雨  
葛機の整ふ杼音日脚伸ぶ  
鼻先に白き散薬忍冬忌

# 風土独語／神蔵 器



かなかなの声のさざ波加悦かやの里

橋添はしぞやよひ

加悦の里は与謝蕪村の母の生れた村である。母の名は「げん」といい、げんの生れた頃の与謝地方はあまり豊かではなく、京や大坂に出稼ぎする男女が多かった。げんもそうした中の一人で、摂津国東成郡毛馬村（現大阪市都島区毛馬村）の富農で村長か何かであった人のもとに下碑として奉公に上った。そこで働くうちに主人の子をみごもった。それが後年の蕪村で、げんは身籠ると歸村して蕪村を生んだとも伝えられるが、富農の家に嫡出が無かったので蕪村がもらわれ、富農の家の家督を継いだという。

いずれにしてもげんが加悦の実家に帰されたことは事実のことのようで、げんが亡くなった時、父親は先祖代々の谷口家の墓所にげんを埋葬することを恥じて、一家の墓所から離れた竹藪の山裾にげん一人を葬った。そこには二基の石塔が建っていて、右手がげんの墓、左手の石塔は流石にげんを哀れに思ったのであろう、「南無妙法蓮華経」とだけ彫られていた。

かなかなは七月下旬頃から八月いっぱい鳴く。朝も時には昼間も鳴くことがあるが、多くは暑い日が西に落ちて、涼しい風が立ちはじめると、澄んだ金属性のようなすき透った美しい声で鳴く。遠くで鳴くと、呼応するように意外に近くさざ波のように心

にひびき、何故ともなくうら淋しい気持になる。

憐みとる蒲公英短して乳をあまを溜。

むかしむかしきりにおもふ慈母の恩

慈母の懐袍わいのぼ別に春あり

（春風馬堤曲より）

母の死去は享保十三年、蕪村十三歳の折というが、早く母に引き離され、蕪村は母に抱かれ、母の乳房を口にくんだまま眠ってしまったことなどあるのだろうか。貧しかった母は悲しい。

私たちが加悦の里を訪れたのは平成十三年、当主のご母堂（十一代目）よりげんさんの墓の拓本をいただいたりしたが、納屋の前にこの日捕えたばかりの蝮が吊るされていたのが何時までも忘れられない。

ひたすらに睡魔を待てば朝蠅 山本 浪子

同時発表の句に「頸椎ヘルニヤ」の前書があった。腰の椎間板ヘルニヤはよく聞くが、頸椎ヘルニヤというのも頸の椎間板の内部の髄核が脊柱管内に脱出を起こす状態を言うのであろうか。腰の場合も大変な痛みをとまなうものであるが、これが頸椎であれば、その痛み苦しみは言語に絶するであろう。鎮痛剤は勿論服用していることであろうが、夏の夜は短いと言っても病者にとっては長い。何とか眠ろうとすればするほど眠れず、ひたすら睡魔のやってくることを祈っているうち夜はようやく明けて来たらしい。かなかなの声が福音のように聞こえて来た。頑張つて下さい。一日も早く快くなってまた句会で会えることを祈っている。

厨子開く弥陀にかなかなしぐれかな

武久 昭子

今年は蟬の発生が多い。かつては一番多かったにいい蟬が何年前かららばったり聞かなくなってしまったのは淋しいが、油蟬、蝸、法師蟬が東京などでも多くなつた。

作者は兵庫県伊丹市に在住、少し足をのばせば京、大阪、若狭などご本尊に阿弥陀如来を秘仏として祀っている寺も多かるう。

今、この独語を書きながら、ふと思ひ出したのは八月の京都支部の吟行が法金剛院であつたことである。そうするとこの句は法金剛院での作かも知れない。

世の中を捨てて捨てえぬ心地して

都はなれぬ我が身なりけり

西行

待賢門院が四十五歳で没するまで面影を慕つて、都を離れられなかつた西行、このとき西行は二十八歳。待賢門院桜は今も春には美しく咲きほこり、大苑池に咲く蓮の花も見事とか。

思はず筆がそれだが、本堂の阿弥陀如来は特に秘仏に指定されてははず、一般の人も間近に拝むことができるとのことである。私はまだ長く憧れながら法金剛院を訪れていないが、作者は親しくご本尊を拝することができたことは何より幸せであつたと思うが、厨子の扉が開いて時雨の降るように鳴くかなかなを阿弥陀様も楽しんでおられるのではなからうか。

盆過ぎの風を見に行く深大寺

林 いづみ

この句のポイントは「盆過ぎ」にある。一年を前後に分けるなら、正月は生者のもの、死者にとつては盆が大事な節目である。田圃

の二番草も取り終り、畑の手入れも済みほつと一息、先祖の霊祭も無事に了つて盆が過ぎると、なお暑さは続きながらも、行く風のかすかな音、流れるうすく白い雲にも、どことなくそこはかとな秋の気配を感じたりする。

「どう、そばでも食べに行くか」

久し振りに深大寺に出掛けたようである。「風を見に行く」は、言えそうでなかなか言えない。

なお歳時記には「盆」は秋の季語になっているが「七月十三日から十五日(または十六日)までの魂祭のことである。地方によっては八月十三日から」ところもある」とある。「盆」を秋の季語とするなら八月十三日の方を主に取り上げるべきであろう。前掲の句も八月の盆過ぎでなければ句意が通らない。

送り火やしんがりの妻振り向きぬ

直井たつる

一年にわずか三日、迎え火を焚いたかと思つたら、もう送り火を焚かなければならない。短い会う瀬、一番しんがりを行く妻がちらつと後ろを振り向いた。「……………」。

送り火の煙が急になびき、地を這うようにして去りゆく妻の後を追つて行つた。

帰省して父の部屋より父の声

中嶋 陽子

帰省した娘の声が玄関でした。母親は飛び出して行つたが、父親は自分の部屋で動かない。「只今」、娘が自分の部屋の障子を開けて顔を見せてくれるその瞬間を待っている。

# 風土集



## 神蔵器選

厨子開く弥陀にかなかなしぐれかな  
伊丹 武久 昭子

桔梗咲く兼好法師の墓処

西行の思慕とや陵のちちろ虫

十二天に鶏頭の花種こぼす

蓮の実の飛ばやペン取る法華帖

送り火の消えてそれより見ゆるもの

盆過ぎの風を見に行く深大寺

夕かなかな浴びて波郷に会ひに行く

葛の花信濃に消ゆる美術館

土産にす忍野の水と新豆腐

炎天の渋谷の人波発酵す

打水や背高ノツポの父戻る

あめんぼう波紋残さぬ騒ぎかな

箸使ひ美しき人なり新豆腐

鍵穴を捜す指先星月夜

東京 林 いづみ

東京 奥田 茶々

ひとつ癒えひとつ患ひ秋に入る  
上尾 根岸 善行

赤松の幹揃ひけり秋はじめ

美しきくらやみ秋の蛸かな

風涼しかり舌鼓打つほどに

鬼瓦月の雫をしたたらす

サイフォンを昇るコーヒー不死男の忌

牛小屋の裏にもありし梅雨菌

音信の絶えて久しき落し文

一片の駄句も飛ばされ扇風機

この家の軒の高さに釣忍

羽抜鶏目玉ばかりとなりけり

外泊許可二泊三日の初秋刀魚

登高や沖に消え行く帆の一つ

義経を寝かせて山車が線路越す

かなかなや宝物殿の大庇

八幡平 伊藤 紫水

千葉 三浦 てる